

## IV 残された問題点

本年度は養殖対象魚種を選定するため、餌料要求及び塩分耐性の両側面からゴマアイゴとティラピヤ類について実験検討してきた。

アイゴ類については供試魚がゴマアイゴ一種のみに限られ、また実験期間が短期間であったこと等によって、対象魚種を特定するに至らなかった。本県礁湖域で普通にみられるアイゴ (*S. fuscescens*)、アミアイゴ (*S. spinus*) とゴマアイゴについて、試験飼料及び天然植物餌料による成長、餌料要求試験を行なって対象種を選定する必要がある。

ティラピヤ類については耐塩水性の面からはティラピヤ・モサムビカが、また成長が速く(餌料要求の巾が広い) さらに大型種である点等からティラピヤ・ニロチカの系統が選定された。

本県礁湖域に多産し、重要な魚種の一つであるアオリイカやハタ類等の養殖生産に際し、耐塩水性品種のティラピヤ・モサムビカは混養方式による活魚餌料としての利用が考えられる。

このような養殖方式は海面においては前例がほとんどない。解決すべき問題点の抽出を図る必要がある、陸上海水池での実験が計画されるべきであろう。

なお耐塩水性のティラピヤ・モサムビカについて、淡水産との比較において、海水中における成長及び繁殖能力を詳細に検討する必要がある。

ティラピヤ・ニロチカの系統については、汽水産ティラピヤ・モサムビカの例のように、歴代選別育種によれば、耐塩水性品種の育成が可能であろう。水温コントロールによる成長の促進を図ることによって、その可能性の検討と成果を早急に得る必要がある。

植物餌料を直接利用させることによる、海域での粗放的養殖または増殖の可能性については、人為的影響をできるだけ与えず、供試魚ができるだけストレスから解放された状態での実験を設計する必要がある。実験は、例えば狭い水槽などではなく、広い池で行なわれることによって、課題の検討ができると考えられる。